

(対象事業： 地域の中核館としての他館や他機関等と連携して行う事業)

事業名： ～風景と花の画家～
曾宮 一念 展

事業者名： 浜松市美術館

連携事業館名： 常葉美術館

住所： 静岡県浜松市松城町100-1

TEL： 053-454-6801

FAX： 053-454-6829

HPアドレス： <http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/artmuse/index.htm>



外観写真

①施設概要

- 敷地面積 3688.57 m²
- 主要構造 鉄筋コンクリート造地上2階一部地階及び塔屋
- 建築面積 1182.86 m²
- 延床面積 2466.29 m²
- 着工 昭和45年7月2日
- 開館 昭和46年7月1日

②事業の意図目的

当館では、地域の公立美術館として年一回を目安に、静岡県や浜松市とのかかわりのある画家を対象に展覧会を企画運営しています。また、館蔵資料収集の方針も地域にゆかりのある画家の作品をあげ、地域の芸術文化振興に務めている。今回の展覧会では、曾宮一念を取り上げています。曾宮は、1945（昭和20）年からは富士宮市に居を定めて絵画制作を続けました。特に、今回は質量ともに充実した曾宮一念のコレクションを誇る常葉美術館の全面的な御協力によって開催するもの。これにより、本県ゆかりの曾宮一念の全貌を展覧できるものと考えています。

③事業概要

本事業は、画家 曾宮一念（1893-1994）を取り上げています。風景画を得意とし、内から燃えるような独特のタッチで桜島、裏磐梯など日本の風景を描き続けました。また、描く対象をより明快で純粋な色面による構成で表現しようと装飾的な和風表現や、色面と線描のうねりを融合させた明快な造形処理によって日本的なフォーヴィズムの確立にも寄与しました。油彩画を中心に、水彩やパステル、素描、書、陶板など多才な創作活動を約100点の作品によって紹介し、また、曾宮一念と親しく交わった鶴田五郎の作品や東京美術学校での恩師 藤島武二の作品、同級生の画家の作品もあわせて展覧いたします。

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 図録

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 3658 人

内 訳

大人 1966人、高校生 85人、小中学生 304人、その他団体 1303人

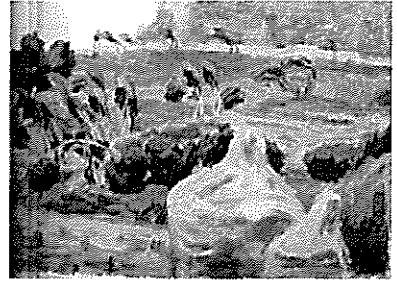
(1) 事業の実施状況について 展覧会概要

I 曾宮一念の画業

曾宮一念の絵画との出会いは、11歳の年に、養父より三宅克己著の「水彩画手引」（精美堂）を買い与えられたことに始まる。当時、三宅克己は、この「水彩画手引」や雑誌「みづゑ」の中で紹介される水彩画入門の執筆を多く行い、大正・昭和の新しい洋画を展開する多くの作家たちを育てたともいえる。

その後は、1907（明治40）年、日本水彩画研究所の日曜講習へ通うことになる。本展覧会の冒頭をかざる《水車小屋》は、このころ制作されたものである。研究所の教師のなかに、大下藤次郎、丸山晚霞、河合新蔵、真野起太郎らの名前が挙がり、同僚に郷土ゆかりの水彩画家、赤城泰舒や水野以文がいたこともうなずける作品である。とても細かい指導を受け、食欲に吸収していく一念の姿をうかがえる。

その後、東京美術学校西洋画科予備科へ入学をきっかけに画家としての道を進むことになる。静岡県とのかかわりは、1910（明治43）年早稲田中学の同級生を大宮町（現富士宮市）に訪ねたのがはじまりで、その後幾度となく写生のため静岡県を訪れ、大正末年には旧制静岡高等学校において教鞭を執り、1945（昭和20）年からは富士宮市に居を定めて絵画制作を続ける。



《桑畑》

1912（大正元）年の《桑畑》は、第2回光風会の出品作品であるが、これは、静岡県上狩野村湯ヶ島（現天城湯ヶ島）での風景を描いている。藤島武二からの指導を受け、初めて公募展へ出品した記念すべき作品といえる。その後も静岡県を舞台とした多くの作品を残している。《御殿場二の岡》1926（大正14）、《掛川逆川べり》1946（昭和21）、《御殿場灯台》1947（昭和22）、《引佐細江》1948（昭和23）、《裾野と愛鷹》1964（昭和39）と県を縦横無尽に走りスケッチを繰り返す姿に、静岡に多くの魅力ある風景を見つけ、洋画家として大成をなす基盤があったといえる。

II 火の山巡礼

1949（昭和24）年11月下旬、熊本を経て、師である黒田清輝や藤島武二の出身地である鹿児島に赴いた一念は、桜島周辺の島、山、溶岩、海などに魅了され、以後、桜島をしばしば訪れて制作を行うようになる。「火の山巡礼」である。

「桜島は多くの名作がかかれたように美しい島で、高さもあり、形も複雑であるし、色も変化に富んでいる。然し島に渡ると、外から眺めたとは全く違ったものに出会う。果樹園や村落もあるにはあるが、驚く程に美しいのは溶岩地帯である。」（『白樺の杖』1969）と語るように、溶岩の怪獣のような樹木のようなその形に惹かれ、黒を基調にしてその中に見える深い紅や紫紺の色に惹かれている。



《海辺の溶岩》

鹿児島で一念は、黒田清輝の《桜島爆発図》1914（大正3）の連作を眼にしている。1914（大正3）年1月の歴史的な桜島大爆発を描いたもので、刻々と変化をしていく桜島の様相を「噴煙」から「湯気」に至るまで時間の経過を追って制作された6枚の連作である。黒田のこの力作を前に、惹かれる美を愛する心と師とは違う作品に挑みたいという画家としての心がきつと交錯した可能性は高い。

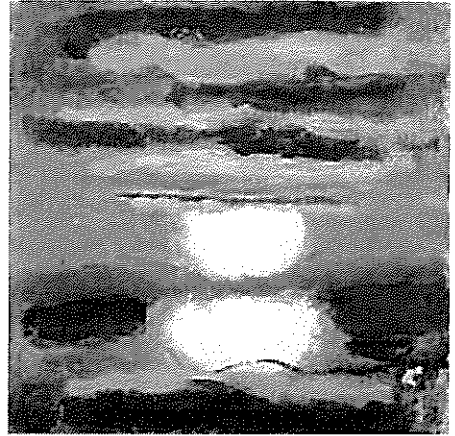
《桜島》と題された1949（昭和24）年と1953（昭和28）の素描は、スピード感あふれる筆致で、美しい桜島の形と刻々と変わりゆく色をとらえようとしている。また、前述したように《海辺の溶岩》では、桜島の沿岸を往く小蒸気船から見た力強い生き生きとした海にせり出した溶岩を描いている。

その後、阿蘇、大島と火の山巡礼は続いた。

Ⅲ 欧州旅行

1967（昭和42）年，74歳の年である。このとき一念は，既に右目は失明し，残る左目も視力は日々衰えていた。

「若いときには，とうとう海外に行かれませんでしたから，広大なシベリアに行きたいと希望を抱いたのですが，当時はまだロシアには行けませんでした。では満州（中国・東北地区）にでも，と思いましたが，それも日本がいた昔とは違い，なかなか行くことができないというのです。それでしかたなく，平凡だけどフランスへ行こう，ということになりました。」（「画家は廃業」1992年）と後日語っている。画家にとっても，フランスは，その知的な関心を充分満たすところであったであろうが，旅行を決定付けたのは船での洋行であった。失明の危険を冒して，船上から落日を繰り返しスケッチしている。

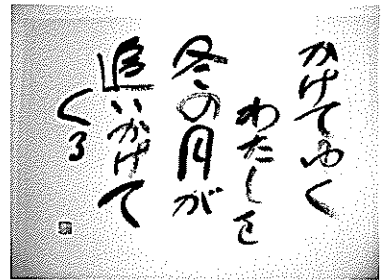


《洋上夕日》

《洋上夕日》は，それらをもとに帰郷後描かれた作品である。同題の油彩作品が4点存在するが，具体的に形の無い自然現象を描く難しさを見事に表現している。《カナリア群島》の雲，《マダガスカル沖》の海も同様に自然を描いているが，これらの作品では，抽象表現により近い作品であるといえよう。

Ⅳ ヘなぶり

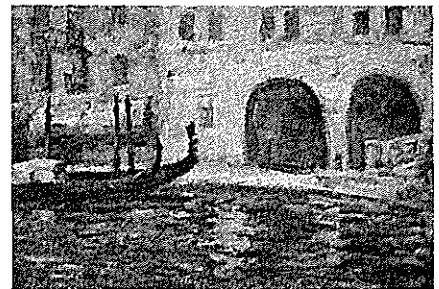
「盲になってから私は短歌とも和歌ともいえるようなしろものじゃない，「ヘなぶり」という歌を詠んでいます。ヘなぶりの「ヘな」は，「鄙（ひな）」ですね。まあ「田舎の歌」というわけです。明治の昔，私が早稲田中学時代にそんな名前の雑誌が出て，すぐ廃刊になったんですが，それを覚えていて，それじゃあ，自分が作る歌には，「ヘなぶり」という名前をつけようと思ったわけです。そうすれば，歌よみの先生から文句もくわないだろう，というわけ・・・」（「画家は廃業 —98翁 生涯を語る—」1992年発行）と語るように，少し謙遜して歌作りを楽しんでいた。画家曾宮一念が，失明という障害にもめげず，最後まで生きた証として，この「ヘなぶり」が存在する。その数，千首あまりといわれている。自分の人生を振り返り，出会った友や家族，心を揺り動かした自然を書き綴っている。



「ヘなぶり」

Ⅴ 曾宮一念と交流のあった画家たち

曾宮一念もその長い画家人生の中で，多くの師と出会い，友と交流を深め，後輩に多くの影響を与えてきた。東京美術学校西洋画科予備科の同級である耳野卯三郎，編入してきた小糸源太郎，美術学校で指導を受けた藤島武二，「どんたくの会」（画塾）を共同で始めた鶴田五郎，二科会を通じて交流のあった小出楯重，独立美術協会新会員として交流のあった海老原喜之助，東京美術学校勤務を要請した安井曾太郎，ともに写生に励んだ山口源や清川泰次，弟子を持たない一念が丁寧に指導した野田妙子。その一つ一つの出会いが，一念の人生を形づくっていった。



《ヴェネチア》藤島武二

(2) 地域との連携について

今回は質量ともに充実した曾宮一念のコレクションを誇る常葉美術館の全面的な協力によって開催した。これにより、本県ゆかりの曾宮一念の全貌を展覧できた。
また、常葉美術館学芸員の大村智基氏と常葉学園大学教授の金原宏行氏による講演会を開催した。

■と き：平成16年8月1日（日）午後2時より

■ところ：浜松市美術館2階講座室

■演 題：「常葉美術館の曾宮一念」

■講 師：常葉美術館学芸員 大村智基

■対 象：当日の入館者（観覧料は必要）申し込み不要

■内 容：1977（昭和52）年6月に常葉美術館は、開館した。開館以来27年間に渡り、静岡県ゆかりの洋画家曾宮一念の作品を中心に収集してきた。常葉美術館では過去に5回の曾宮の展覧会を開催してきた。

講演会では、曾宮作品の中でも代表作のひとつにも挙げられる「冬日」や、国内の数々の場所を描いた作品、ヨーロッパ旅行で制作された作品、へなぶりと呼ばれる短詩など、常葉美術館が所蔵する全90点の油彩、水彩、素描、陶板、書のスライドによって、曾宮芸術の全貌を紹介した。



講演会風景（大村氏）

■と き：平成16年8月8日（日）午後2時より

■ところ：浜松市美術館2階講座室

■演 題：「曾宮一念と近代日本洋画」

■講 師：金原宏行 常葉学園大学教授

■対 象：当日の入館者（観覧料は必要）申し込み不要

■内 容：曾宮の画風は、自然の風景の生命力に触発されて写生を十二分に練りあげていることを示し、陽光に満ちた、時には変化する一瞬をとらえた驟雨や虹、月の情景をはじめ、海山、波、空、雲の描写においてさまざまな姿をみせてくれる。講演会では、曾宮芸術の展開を前期、中期、後期の大きく3期に分けて考え、曾宮と近代洋画の巨匠岸田劉生・中村彝・鶴田吾郎・黒田清輝・藤島武二などの作家とのかかわりをスライドで紹介した。



講演会風景（金原氏）

(3) 成果物について

展覧会図録として、展示作品のすべてを掲載した図録を作成した。

2頁 あいさつ 浜松市美術館・中日新聞東海本社

3頁 あいさつ 木宮和彦（常葉学園長）

4頁 謝辞

6頁 曾宮一念と近代日本洋画 金原宏行（常葉学園大学教授）

10頁 図版 I 曾宮一念の画業

II 火の山巡礼

III 欧州旅行

IV へなぶり

V 曾宮一念と交流のあった画家たち

79頁 曾宮一念の芸術 今田 徹
(浜松市美術館学芸員)

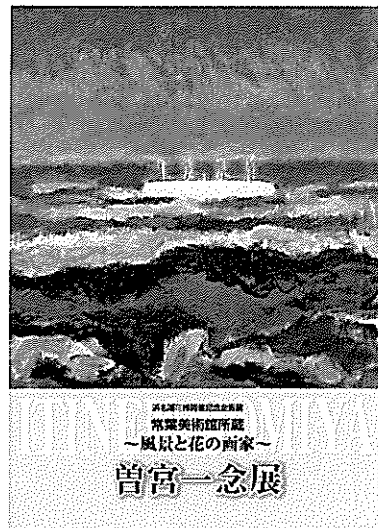
83頁 作品解説

90頁 作品取材地図

91頁 年譜

97頁 参考文献

98頁 出品目録 (総ページ数 100ページ)



(4) 参加者の反応

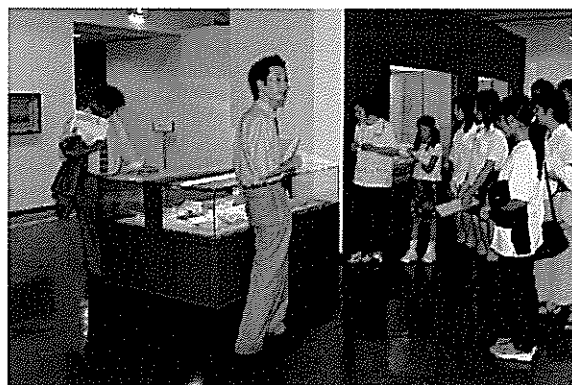
アンケート集計結果より

○展示内容について

- ・絵のジャンルが広すぎて混乱した。(20代男性・学生)
- ・絵がきれいに並んでいて見やすかった。(10代女性・学生)
- ・きれいな絵がたくさんあって、まあまあよかった。(10代女性・学生)
- ・もっといろいろな作品があると思っていたが、あまり多くなく、ちょっと残念かったです。見ごたえはあったと思います。(10代女性・学生)
- ・もっと描きこんで欲しい作品もあったし、派手さが少なかった。(10代女性・学生)
- ・落ち着いた空気の中、整然としたテーマに沿って並べられていたため、たいへんよかった。(10代女性・学生)
- ・生涯の作品が見られたので、たいへんよかった。(10代女性・学生)
- ・実物をみることでたいへんよかった。(30代男性・会社員)
- ・曾宮一念の内容がわかりやすかった。(50代男性)
- ・絵がわかりやすい。(60代女性)
- ・ビデオで曾宮一念の人柄を感じ取ることができた。(50代女性・公務員)
- ・同型、同描の作品が並んでなく、興味が継続する。(60歳以上女性・主婦)
- ・子供も楽しそうに見ていた。展示が分かりやすかった。(30代女性・主婦)
- ・絵が鉛筆なのに、とてもきれい。(10代女性・学生)
- ・展示が1階と2階なのはよかった。(10代女性・学生)
- ・今まで何度も見ているので、特によくなかったというのはない。普通。(60歳以上代女性・無職)
- ・いろんな絵があった。(10代男性・学生)
- ・水彩の風景画がもう少し多く展示してあると思い、来館しました。(50代女性・会社員)
- ・何か心からわきでた絵のように思われました。(60歳以上女性・主婦)
- ・絵の勉強になった。(10代女性・学生)
- ・ビデオがもう少し新しいもので、まとまった内容のものであったらよかった。(30代女性・会社員)

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

約30年ぶりに行った曾宮一念展だが、多くの市民の方に紹介することができた。また、今回は、常葉美術館の全面的な協力のもと開催した展覧会であるため、素描と油彩画を並べて展示することができ、一念の対象を捉える姿勢を顕彰することができた。また、静岡県立美術館からの借用作品も多く展示することができ、郷土の画家としてその画歴を総合的に紹介することができた。



ギャラリートーク風景